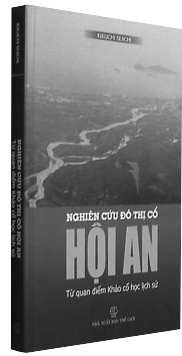


KIKUCHI SEIICHI 著

NGHIÊN CỨU ĐỒ THỊ CỔ HỘI AN
Tư quan điểm Khảo cổ học lịch sử

山形 眞理子



2010年8月刊
NHÀ XUẤT BẢN
THẾ GIỚI, Hà Nội
菊判変形 324頁
定価 86.000 đ

本学教授・菊池誠一氏の著書『ベトナム日本町の考古学』（二〇〇三年、高志書院、東京）のベトナム語版が刊行された。その書名を直訳すると『ホイアン古都市の研究―歴史考古学の視点から』となる。原著については大沢眞澄氏による総合的な紹介がある（本誌七五九号、一一九―一二一ページ）。

一九九九年にユネスコ世界遺産に登録されたホイアンの町並みは、ベトナムはもとより各国から訪れる人々を魅了してやまない。このホイアンの町並み保存事業には一九九三年以来、本学が大きく貢献してきた。本学の協力体制は複数の分野から成り立っているが、そのうち考古学分野を率いてきたのが菊池氏である。

日本人考古学者の著作が日本語からベトナム語に訳され、単行本としてベトナムで出版されたのは初めての快挙ではないだろうか。訳書には原著の内容をそのまま翻訳している部分と、大幅な改訂を加えて再構成している部分とがある。

原著の二部構成「第一部 ホイアン地域の形成と

展開」「第二部 ホイアン出土陶磁器の考古学的研究」は訳書でも変わっていないが、変更が目立つのは第一部である。まず、訳書の「序章」では、「目的と方法」「研究課題」のあとに「研究結果」という項目がくる。そして、ここで原著の「終章」が訳されている。つまり訳書では、結論が序章の中に組み込まれている。

つぎに、原著第2章「遺跡分布からみたホイアン地域の形成と展開」は三つの節に分かれているが、訳書では各節をさらに細かく分けて小見出しを付した。「サーフィン文化」「ホイアンのサーフィン文化」「チャンパ文化」「チャンパ文化遺跡の分布」「一五世紀から一六世紀」「一六世紀後半から一七世紀までの遺跡分布」といった具体的な項目が並ぶ。

さらに、原著第3章「ホイアン旧市街地の形成と展開」は、訳書では第3章「考古学研究からみたホイアンの日本町」と第4章「ホイアン旧市街地の形成と展開（碑文、文献史料、考古学資料からみて）」の二章に分けられている。注目されたのは、原著で

ホイアン旧市街地の発掘調査成果が細かく報告されている部分を、訳書では大幅に割愛している点である。代わりに訳書第3章においては、ベトナムの学術雑誌に掲載された菊池氏の別稿をもとに、ホイアン日本町をめぐる諸問題を包括的に論じている。その章の最後は「ホイアンの考古学研究は日本町の研究にとどまるものではない。より広い視野から、ベトナム史における国際関係と日越の交流史を明らかにするという貢献を果たしており、大きな意義を持つ研究である」という文言で締めくくられる。

以上のような改変は、ベトナム人読者を強く意識して行われたものであろう。多くのベトナム人読者は、ベトナム中部の歴史といえばチャンパやサーフィン文化を思い浮かべるはずである。そこで訳書の第2章ではそれらを独立した項目とした。また、ホイアン旧市街地の発掘調査報告は専門的に過ぎる。つまり本書は一部の専門家ではなく、より広範囲のベトナム人を読者として想定したことが理解される。

本書はベトナム人ならば誰でも知っているホイアンという町を入口とし、歴史考古学を通路として、広南阮氏政権つまりダンジョンをめぐる国際関係という出口に至る、知的探求の軌跡でもある。しかしダンジョンの歴史や考古になじみがある読者はベトナム

ナムでも少数であろう。その意味で「研究結果」を序章に配したことは、読者の理解を助けるのに効果的であったと思われる。

以上のような改変にもかかわらず、原著のねらいや内容は訳書でも変わってはいない。

三〇〇ページの専門書の翻訳作業は、どのように完遂されたのか。菊池氏自身にうかがったところ、まず、日本語をよく知っているが考古学を専門としていないベトナム人が訳した文章を菊池氏が点検し、専門用語とその使い方を修正した。その訳文を、歴史学者でハノイ国家大学副学長のゲン・ヴァン・キム教授門下の大学院生が修正した。それをさらにキム教授が修正し、最終的にはキム教授とその門下生に菊池氏が加わり、訳文全体をチェックしたという。

最も困難だったのは漢文資料の翻訳であった。『大越史記全書』のように既にベトナム語訳本があるものについては菊池氏自身が確認して引用することができたが、ホイアンの地方文書や金石文については適切なベトナム語訳がないため、菊池氏自身が悪心して翻訳したという。このように慎重な過程を経たために刊行までに数年という時間を要したわけだが、その甲斐あってベトナム語の訳文は分かり易い。なお、本書の出版費用はすべてハノイの世界出版社が負担したという。ベトナム側が本書を高く評価し、その刊行に社会的意義を見出したゆえの援助

であろう。そのため、本書はベトナム国家図書館選定図書となっている。

惜しむらくは、原著の図版がそのまま使われ、図中の日本語注記がベトナム語に修正されていない箇所がある。ベトナムで出版される学術書や論文について一般に言えることなのだが、図版のチェックが行き届いていない。版を重ねる際には是非、図版の再点検とさらなる充実をお願いしたい。

本書には菊池氏の業績と人柄を知悉する二人のベトナム人が寄稿している。まず、ベトナム歴史学界の重鎮であり、ベトナム歴史科学協会会長を務めるファン・フィ・レ教授による巻頭言「紹介の辞」がある。「わたしは今もよく覚えている。一九九二年、当時私が所長を務めていたハノイ総合大学ベトナム研究センターに、ひとりの日本人青年が訪ねてきたのだ」という一文から始まる巻頭言は、「留学当初から菊池氏を支えてきた教授の暖かいまなざしと、その菊池氏がベトナムで成し遂げた事業への感服と感謝の念に満ちている。」

レ教授は、菊池氏の研究には二つの特徴があると述べている。第一に、菊池氏が考古学を中心としながらも、歴史、地理、地質、文化、社会、生態環境といった隣接諸分野の研究方法を連結させていること。第二に、菊池氏の研究が古都ホイアンとその周辺を題材とした地域研究として結実していること。つまり様々な角度から、先史から現代まで通時的に

続く、ひとつの地域の特性を浮き彫りにしていること、である。

ゲン・ヴァン・キム教授もまた、「ひとつの地域を探索する―菊池誠一教授著『ホイアン古都市の研究』を読んで思うこと」という一文を寄せている。近世東アジア国際貿易を専門とし、江戸幕府の鎖国政策に関する著作もあるキム教授は、菊池氏の長年の共同研究者である。キム教授は歴史考古学者としての菊池氏について、考古資料は必ず自ら手にとりて観察し、どんなに遠い遺跡にも赴いて踏査し、文献史料は必ず原典にあたるという、厳格な研究態度を賞賛している。そして様々な分野の専門家をホイアン研究に招き入れ、その方法論を連結するという功績を上げた菊池氏は、「ベトナムと日本の専門家たちを結びつける『橋渡し』の役割を果たしている」という。

あらためて、一九九三年から今日まで菊池氏が一筋にたどってきた調査研究の軌跡とその業績の偉大さに、胸を打たれる。本書がベトナムで上梓されたことは、日越間の文化交流に新たなページが加えられたと評価される慶事である。多くのベトナム人が本書を読み、ホイアンの背後に横たわる国際関係の広がりや、地中に刻まれた歴史の深さに思いを馳せてほしいと願う。

(やまがた まりこ 国際文化研究所客員研究員)